このコーナーでは、この地域に伝わる民話を紹介し、皆さんからの感想画を募集しています。紹介する民話は、子どもたちに、ふるさとの伝説や昔話を教え、少しでも遠い祖先の心や、郷里の土地のぬくもりを感じてほしいと、松浦市教育委員会が平成4年に再編した「松浦の民話」という本から引用した話です。

松浦の民話⑬

淀姫様

今から千八百年ほど昔のお話です。

そのころ、神功皇后は、妹の淀姫と一緒に、新羅の国（今の韓国）へわたろうと旅へ出られました。

お供の家来たちを連れて、野をこえ、山をこえ、やっと呼子の地へ着かれました。これからは、海をわたらなければなりません。皇后は淀姫をおよびになり、↘

「これから、わたしは、海をわたる丈夫な船と、この海になれた船頭たちを集めなければなりません。あなたは、その間に、松浦の地をたずねて、景行社へお参りをし、旅の安全をいのってきてください。」と申されました。

そこで、淀姫は数人のお供を連れ、小船に乗って玄界灘を西へ向かわれました。↖

玄界灘のあらい波に、小船は木の葉のようにゆれ、みんなは、船底に生きた心地もなくしがみついていました。

やっと、波静かな松浦の入江についたころは、もう、夕やみがあたりをとっぷりと包んでおりました。

船よいで、ぐったりと船底にふせておられた淀姫は、やっとのことで、砂浜の美しい大浜の地に下りられました。

朝から飲まず食わずで、みんなつかれきっていましたが、とりあえず、松のかれえだを集め、火をたいて、しぶきでぬれた衣をかわかしておりました。ちらちらもえる火は、向こう岸の貝ほり帰りの村人たちの目に止まりました。

「何じゃろか、あの火は。」

「あやしかもんでも来たとじゃなかな。」

「あっ、そうか。近いうち、皇后様のお使いが、景行社に見えるということじゃったせん、その一行かもしれんばい。早う行ってみらんば…。」

村人たちは、大急ぎでかけつけてみました。

すると、お供の人たちに守られて、美しいお姫様がすわっておられました。金細工のくしやかんざしをつけ、金糸、銀糸をおりまぜた衣を着けたお姫様は、村人たちを見ると、

「姉の使いで、景行社へお参りに来ました。案内をお願いします。」

と申されました。

でも、一行はひどくつかれておられるようでしたので、村人たちは、おそる、おそる、自分たちの持っていた、そてつの実で作ったおだんごをさし出しました。

「こぎゃんそまつかもんでよかったら…。」

「なんもおあがっておらんとでっしょう。おあがりなさりまっせ。」

一行は、村人たちの温かいもてなしに感しゃしながら、

「これはありがたい。」

と、おいしそうにお食べになりました。

それから、村人の案内で一夜の宿をとり、よく朝、景行社へお参りされました。

やがて、皇后とともに呼子から新羅の国へわたられた淀姫は、無事に用事を終えてもどられると、再び松浦の地へよられました。この土地が大変気に入られた淀姫は、館を建て、村人たちと仲よくくらし、一生をこの地で送られました。

淀姫がなくなられた後、景行社あとに淀姫様をお祭りし、淀姫神社と呼ぶようになりました。

淀姫が、初めておだんごをお食べになった所は、膳崎（柏崎）という地名として残っています。

志佐宮日は、この淀姫様のお祭りです。その日は今でも、村人がお団子を作って、お宮に供えるならわしが残っているそうです。（志佐町）

■あなたの力作を募集！

―民話の感想画募集―

上の民話を読んで感じた情景をイラストにして、必要事項を記入の上、左記まで持参、郵送またはメールにて送付してください。応募いただいたイラストは審査をし、上位のものを次の市報で紹介します。

【応募資格】住所、年齢、性別など何も問いません。どなたでも応募できます。

【イラストの規格】はがきまたはA4サイズ以内の紙に絵の具やクレパスなどで書いたカラーのもの（色鉛筆の場合は濃く塗ってください）。

【必要事項】住所、氏名（ふりがな）、電話番号、年齢、職業（学校名）

※掲載する場合、ペンネームを希望する人は、ペンネームもご記入ください。

※はがきで応募される人は、必要事項を表の下部に記載してください。なお、いただいた個人情報は民話コーナー以外には使用しません。

【応募締切】4月12日（火）必着

【応募・問合せ先】

〒859-4598
松浦市志佐町里免365番地
松浦市まちづくり推進課
秘書広報係
☎0956-72-1111
Eメール＝hisyo@city.matsuura.lg.jp

※福島支所、鷹島支所、そのほかの各支所でも受け付けています。

わたしたちの郷土 ―63巻―

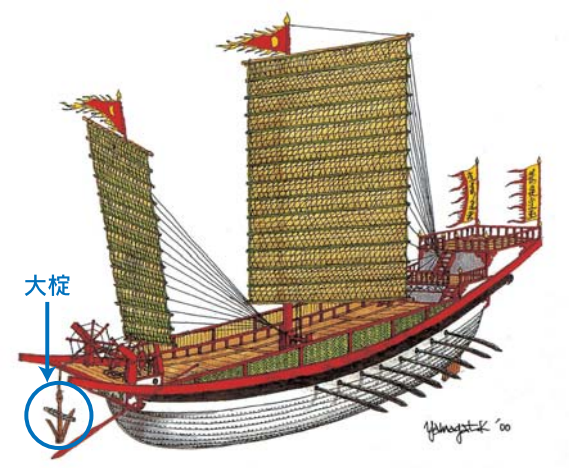
中世の松浦（29）鷹島海底遺跡

元軍は、弘安4年（1281年）に東路軍9百艘、江南軍3千5百艘の合わせて4千4百艘で日本を攻めにきています。この弘安の役では鷹島近海に集結していた多くの軍船が、閏7月1日の暴風雨で沈没したといわれています。

鷹島海底遺跡からは船を停めておくために海に投げ入れる重りに使用されていた大碇が引き揚げられています。その木製大碇（3号碇）を復元すると全長が7メートルほどになります。

この復元された大碇をもとに日本海事史学会の山形欣哉氏が元軍の戦艦を復元しています。その戦艦の全長は宋尺の1 26尺（約40メートル）、幅は33・6尺（約10・7メートル）、1艘当たりの乗員は90人弱としています。

鷹島海底遺跡から引き揚げた大碇は現在鷹島埋蔵文化財センターで展示公開しています。



▲復元された元軍の戦艦図（山形欣哉作成）

松浦の民話イラスト

読者の皆さんから寄せられたイラストの審査結果を以下の通りお知らせします。

先月の民話「庄屋の忠犬」のイラストに、3通の応募がありました。ご応募ありがとうございました。

【最優秀賞】

長谷　陽南（ひな）ちゃん（星鹿保育園、6）（左）
湯髙　拓真（たくま）くん（星鹿保育園、6）（右）
「ひとつの物語を2人で描いてくれました。2枚合わせると、物語がつながって、とてもいい絵に仕上がっていますね。」（はま）

【優秀賞】

前田サツキさん
（福島・日の浦、70）
「毎月イラストを送っていただきありがとうございます。自分の犬を切ってしまった庄屋さんの後姿に、後悔の表情が見えるようです。」（はま）